

第一講

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

白露の君(女)は、中納言家の子息である侍従と契りを結んだが、その後、侍従の訪れも連絡も途絶えてしまった。

かくてのみ思しわづらひつつ、はかなく月日のたち過れば、女方は、「いとうらめしう、かく跡もなく絶え果て給ひにけること。せめてはかなき一くだりにても、折々につけて聞こえ通はし、おのづからかれがれるさまにものし給はんこそ、世のつねのことにはあらめ。にはかにひき切りたるさまになり給へるを、心ゆかぬわざにもあるかな。さるあはあはしき人の御ありさまとも見え給はざりしかな」と、女房などはいとほしがれど、女はさしも漏らし給はず。御心ひとつに「^aさればよ」と、いとあぢきなう思ほし嘆いたり。さりとも、よもやかばかりにてはと、人知れず待ち給へれど、いとかくおぼつかなくて、秋も暮れ果てにければ、「いかなる御風心地にても、さやうにものし給へるにや」とて、こなたに参り通ふ便りにつけて、かごとばかりのこ

【出典】

『しら露』

【重要語句】

- 思しわづらふ
- はかなし
- ゝ果つ
- おのづから
- かれがれなり
- ものす
- 心ゆかず
- わざ
- あはあはし
- いとほしがる
- さしもゝ打消
- さればよ
- あぢきなし
- 思ほし嘆く
- さりとも
- よも(や)ゝ打消推量
- おぼつかなし
- 便り
- かごとばかり
- 悩み
- 聞こえさす

と問はずれど、「さる御悩みにても」^Aとも聞こえさせず。ゆくてばかりの言つてだにかき絶えたれば、「よし、さばかりにてやみ給ひね。あいなき憂き名にたち騒がれ、人わろき恥に身をやつさんより」と、少しは猛き方もあれど、さすがに「この人々のいかがが思ふらん。言ひがひなくて、飽かれ奉りけん」と、わが身の怠りに聞こえなさんが、よろづのことより心やまし」と思し乱れて、ひたすらに起きも上がらず、ただ涙にのみまつはれ臥し給へり。

杉子ひとり心知りにて、「げに、さ思し入るもことわりぞかし」と、いと悲しう見奉りて、かしこき占方の人に物問はせなどし、また、我がする心の占にも、「むげに捨てさせ給ふとは見えぬ。ただ、いささかのたがひ目により、思しわづらふ筋ありて」など、いづれもいづれも聞こゆれば、いかさまにかと思ひめぐらすも、いと^Bなかなかなる心尽くしなり。しめやかなる宵の人間に、みそかに近うさしよりて、「いとさかしきわざには侍りつれど、余りいぶせき心のままに、おのれ親しき^{かうが}勤への人に忍びてさることうかがはせつれば、かなたのなほざりはゆめゆめ侍らぬよし、これかれに心見させても、さやうにのみ申し侍るを。余りつれなき御心ざまを、こなたより少し驚かし聞こえ給ふまじくや。いみじき便り求め出でしを、よろしき隙に伝へさせん」とささめけば、「いと^b便なきこと。何かは、かばかり御心と古され奉りながら、我が身の醜きありさ

- よし〈副詞〉
- あいなし
- 憂き名
- 人わろし
- やつす
- 猛し
- さすがに
- 言ひがひなし
- 奉る
- 怠り
- 聞こゆ
- くなす
- 心やまし
- まつはる
- げに
- 思し入る
- ことわりなり
- かしこし
- むげに
- たがひ目
- なかなかなり
- 心尽くし
- みそかなり
- さかし
- 侍り

まにて、人をばかこち奉るべき。よし、絶えざらん縁ありなば、おのづから思しなほらん」など、さすがに思し入りぬるさまにて聞こえ給へば、「なぞ、かう埋もれたる御心ざまぞ。我からの過ちにてだに、人を恨むる世のためしのなしとばかりや思すべき。あしきこと計らひ聞こえて、かくばかりやは聞エこえさせん」とて、御硯すずりとりまかなひて、書かせ奉る。

(『しら露』)

注 杉子

白露の君の侍女。

勘への人

「占方の人」に同じ。

(一) 傍線—— a・bの意味として適當なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

- | | | | | |
|---|------|---|---|---|
| a | さればよ | | | |
| | | 1 | 2 | 3 |
| | | 1 | 2 | 3 |
| | | 4 | 5 | |
| | | 1 | 2 | 3 |
| | | 4 | 5 | |
- 1 思っていたとおりでわ
2 こんなことになるなんて
3 これも運命なのかもしれない
4 あんなに約束してくれたのに
5 もうどうなつてもいい

- いぶせし
- 忍ぶ
- ゆめゆめく打消
- よし(名詞)
- つれなし
- 驚かす
- よろし
- 隙
- 便なし
- 何かは
- 心と
- 古す
- かこつ
- なぞ
- 埋もる
- 我から
- 世のためし
- とりまかなふ